

「Tさんという婦人がいました。彼女は四人の子宝に恵まれた後、年若くして夫に先立たれ、女手一つで子供たちを育てていました。冬のある日のこと。私はTさんの家の近くで仕事があり、時間があつたので彼女の家で休ませてもらうことにしました。外では木枯らしが吹いている一方で、部屋の中は暖かくコタツに足を入れて休んでいた私は、いつのまにか寝入ってしまった。しばらくして部屋にきたTさんは、その姿を見てこう言ったのです。

「先生は人を相手に生きていますね…」
唐突な言葉に一瞬戸惑いつつも、私は答えました。

「そうです。私は墓場で暮らしているわけではありません。目も動く、手も動く、生きた人を相手に仕事をし、生きています」

そうは答えたものの、こんな当たり前と思えることを問う彼女の真意を測りかねた私は、思わず「そういうあなたは、誰を相手に生きているのですか」と問い返しました。

すると彼女は「私は、今は亡き人を相手に生きています。若くして亡くなった主人や、今は亡き両親、兄弟の目を意識しながら…」と答えるではないですか。

この言葉を耳にした瞬間、私は鳥肌のたつような身震いを覚えました。今の今まで、どこにでもいる平凡な主婦人と思っていた相手が、とてつもないスケールの人物であったという驚きと、そして自分の未熟さにムチ打たれた思いを味わったのです。

誰しも少なからず、人からの評価を気にして生きているものです。その一方で、人の目の届かないところでは手を抜く、傲慢になるといふことはいないでしょうか。



え・中村頼子

『人が見ていない 場所でこそ...』

中味は貧弱なのに、少しでも人から褒められたい、いい人と思われたいと背伸びをした立ち振る舞いをしてしまうのが人間です。そうした言動には無理があるのですから、当然どこかにしわ寄せが出るのです。

一例として「某社長」を挙げましょう。外では物わかりがよく愛想も抜群と評判の彼が、実は会社に戻ると強情で社員の言葉にはまるで耳も傾けないワンマンとなる。家に一歩足を踏み入れれば、妻の言うことは聞きもしないし返事もしない。そればかりか「お前たちは誰のおかげで今の生活ができるのか」と我がもの顔で居すわっている。

子供に対しても「学校に行けるのは誰のおかげだ」と口汚く罵る。結婚以来、妻に対して「ありがとつ」の一言もない男が、隣家の奥さんには「おはようございます。今日もいい天気ですね」と愛想を振りまいている。

彼には△男は外に出れば七人の敵がいる。毎日必死に働いているのだから、家の中の少々のワガママには目をつぶれよという甘えがあるのです。このような内弁慶では、たとえどれほどの評判を得ようと、仕事を支える家庭内での振る舞いがおぼつかなくては、何をやっても実りはないでしょう。

他人の目や口が気になる人ほど、見られていないと思うとお粗末な行動に走るもの。「旅の恥はかきすて」という考え方など、その典型でしょう。「天網恢恢疎にして漏らさず」という譬えもあるように、人の生き方はごまかしがきかぬものです。

人が見ていようと見てまいと、自分の良心に正直に生きる。「他人の目」がない家庭内での実践こそ今一度見直し、まずは家族に喜ばれる人になりましょう。